

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.127  
2014.4.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

36

## 「地域に仲間組織をと 長野県考古学会の創立」

下伊那郡売木小中学校での教師としての生活は十分に満喫していた。考古学の面では村内の遺跡踏査や村外での発掘調査には参加できた、が普段私の周囲に考古学を話す相手が居ないのが本当に淋しかった。大学時代は何時でも誰かと気楽に考古学の話が出来た。売木では考古学を分かってくれる人は誰も居ない。大学時代の仲間からの便りもこない。私は仲間から見捨てられたと思い込み、ある夜夢に見て目覚め淋しくて泣いた。それがキッカケで地域の仲間組織について向坂鋼二さんと相談して「地方研究者の悩みとその解決への試案」を『考古学手帖』にのせた。県南端の交通不便な売木では行動面でも思うように動けなかった。36年 木曾郡日義小中学校に転任した。中央西線宮越駅が近く汽車に乗れば松本に行けて樋口昇一さんに会えた。夏休み開田高原柳又遺跡発掘に参加して調査の仲間は公民館に合宿した。夜 樋口さんと枕を並べて種々話した。その一つに県内の考古学仲間呼びかけて県的な集いを作ろうと。そのことを「地域の結びつきを」と題して『考古学研究』に投稿した。11月 二人で県内の研究者に学会組織の呼びかけの葉書を出す。12月 返事をもとに結成について話す。大勢の方々が賛成し近くの仲間を紹介してくれた。これなら結成できると喜び発起人會を持つことにした。37年1月14・15日 松本市浅間温泉に発起人會を持つ。県下の仲間が喜んで集まってくれ、嬉しさや興奮の中で話はとんとん拍子に進んだ。夜の懇親會も話がはずみ時間を忘れて話し込んだ。それだけみんなが待ち望んでいたのです。だから28才という若い私が呼びかけたのにも年令に関係なく賛同してくれたのです。二人が中心になって準備委員会を持ち、5月13日 松本市で創立總會を開き、会場には県内各地の旧石器を持ち寄って展示した。11月11日 富士見町井

戸尻考古館で第一回長野県考古学大会を持った。縄文中期の大遺跡ということで県外からも参加者があって盛大でした。此の時 武藤雄六さんが竪穴住居址の切り合いと出土土器セットでの型式編年は貝塚での層位編年とは違った新しい捉えであり、しかも完全土器での提示は参加者に驚異で受け止められた。これがキッカケで39年11月諏訪市にて『縄文中期文化シンポジウム』を持った。県考古学会員だけでなく県外からも多くの縄文研究者が参加し研究会は多くの意見が飛び交い内容のある会となった。夜 藤森栄一先生の旅館「やまのや」に参加者皆が泊り研究会の興奮が持ち越されあっちこちでグループが出来て話し込んでいた。こうして長野県考古学会は県的にも纏まり、県外からも注目される学会となった。樋口さんは事務局長・私は事務局員で学会活動を支える役員として活動し、私は手刷りガリ版の連絡紙を桐原健さんと交代で発行した。このように順調に発足したかのように見える学会も、既に県内の地域研究者の会である『信濃史学会』との関係で会長の一志茂樹先生の意向があつて発足前に樋口さんが話し合いを持って来て無事発足できた。こうした対外的な交渉は全て樋口さんが対応してくれ、私はただ声をかけたただけでした。考えてみると県考古学会は樋口さんが居なければ創立出来なかったと思う。本当に良い友達を持ったな、運に恵まれていたなと思う。

当時 県下の多くの仲間がとにかく集まって話したい、名前は知っていても顔見知りでない仲間たち、お互いに知り合って交流を深めたいという思いがみんなに強かった。私もこれをキッカケに全県的に、年令に関係なく考古学という共通の学問で結ばれた仲間が出来て、県教育委員会埋文担当指導主事になり県下の分布調査を進めたとき各地の仲間たちの協力で調査できた。

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

## 目次

■田舎考古学人回想誌	地域に仲間組織をと長野県考古学会の創立 神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第120回) 臼居直之 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第15回) 石井則孝 …2	■考古学者の書棚	「中世都市から城下町へ」 …4

## 考古学の履歴書

## 公務員としての考古学研究者(第15回)

石井 則孝

## 《わが友・わが趣味 ―その4―》

## はじめに

バルカン半島上陸後については、昭和38年(1963)秋の『早稲田学報』に「バルカン半島探査記」として報告してあるので省略する。日本への帰国に際して、旅費がなく残ったのがスバルサンバー、大陸は陸続き、何とかマレー半島のシンガポールまで辿りつけるのではないかと。ガソリン程度は持っていたので、土田純二さんと二人で38年10月末ベオグラードを出発した。土田さんは無免許、色々な事件に遭遇しながらインドのカルカッタまで辿りついたが、それから先は道が無い。無銭旅行の軽自動車サンバーによる大旅行はカルカッタで終了した。この記録は、『陽気な無宿旅行』東都書房で刊行され、ベストセラーになり、新聞やラジオでももてはやされた。若い人に是非読んでいただきたい。

## 1. わが趣味

趣味とは広辞苑によると①感興をさそう状態、おもむき・あじわい。②ものごとのあじわいを感じとる力、美的な感覚のもち方、このみ。③専門家としてでなく、楽しみとする事柄。と記されている。本当の自分の趣味は何だろうかと考えたのは今回が初めてである。読書・音楽・美術鑑賞・美術品の収集、喰べること、酒を飲むこと、将棋・碁・マージャンに興ずること、馬券買い等々広くこの年までやってきているが…。果たして何が本命なのだろうか?大学院時代安藤先生から「モノ(古美術品)が欲しければ自分で買って本物が贋物か自分の眼で確かめろ!!」が教えた。ソバ猪口の購入が最初であった。それが、酒を嗜むようになってからは酒の猪口に変わり、著名な作家の作品とか新人の作品とかかなりの数に達している。染付け、青磁など各種あり、楽しんで使っている。また絵画については、隣りの家がハーンの3男洋画家小泉 清の家で、小学校の同級生では、日本美術院同人になった小谷津雅美が友人で、拙宅へは、南画家の横内大明さん、洋画家の峯村リツ子さんなどが良く遊びにきていた。

そんな環境から、絵を観ることも好きになり、美術館以外ではデパートの画廊へは良く行った。先述した通り大学院が芸術学専攻でもあったので、中国・日本の古画や佛像にも親しく接することも出来、京都・奈良へ出掛ければ、良い物・本物に接することもあって自然と趣味が嵩じて多くの作家のみなさんとの交流もあった。また毎年夏、早大の同窓仲間、ユーゴ協会の仲間、あるいは野外研のみなさんたちと中国行の視察研究旅行を日中旅行社にアレンジしてもらい、私がリーダー格で定年後15年間ほど実施できたことも大きな収穫であった。

## 2. 私の仕事内容

文化財保護委員会へ入省して以来、勤務が東京→奈良→千葉→東京へと移り変っていった。この間多くの芸術家・作家・建築家・研究者との出会いから自分自身の目を養って来たようである。奈良では、古美術写真の飛鳥園小川晴暁・光三親子の作品にじかに接し、撮影の現場・自宅の仕事場・隣りが日吉館なので多くの著名人が飛鳥園へ顔を出しており、そのよう

な方たちとの交流も得て古美術について多くのことを学ばせていただいた。奈良へ着任した時、住むところがなく奈良国立博物館の敷地内にあった奈良博の宿泊施設に、横田拓実・鬼頭清明・高島忠平・佐藤興治さんなどと共同生活のかたちで1年間住んでいた。そのお蔭で歴史・考古・美術環境がすこぶる良く、奈良市内で行われている行事(大寺院の行事も含めて)を1年間通して学ぶことも出来、これは奈文研に勤務する者にとって大いなる勉強にもなった。仕事の中心は平城宮跡の発掘が中心であったが、周辺の県・市への応援協力で、京都・大阪・三重・和歌山・奈良市内への発掘参加もあり、自身の考古学研究の助けと目のコヤシには相当のものであったろうと感じている。奈良に8年、千葉に10年、この千葉時代が新設館の博物館・美術館造りで、風土記の丘の整備も加わり、上総博・市川博・県立美術館の建設に参画した。

展示品の製作・購入・評価等々、建物そのものの環境整備、使い勝手、建築材の研究、設計者、現場監督者とは真の戦いであった。特に美術品の購入は高額な金子を伴う関係から確かな目ききが必要であった。美術館の時には、浅井忠作品を集中的に収集する目的から、京都をはじめ、各地のコレクター廻りを何回も行き、1000点以上の作品に接する機会を持つことが出来た。

## 3. 私が交流した芸術家たち

机上の学問も大事ではあるが、人との交流はもっと重要で、人間を豊かにさせてくれる。日本に「人間国宝」という制度が存在しているが、これこそ日本人のすばらしさを生かす重要な選択である。「人間重要文化財」を増設して、若い優秀な芸術家・作家・職人を養成する時代に入ったと考えているがいかがなものだろうか。

先きにも小泉 清のことは記したが、子供の時から絵の世界へ引き込ませてくれた大先生であり、となりのオジちゃんでもあった。小谷津雅美さんとは、大人になってからも友情は続き院展の春と秋の展覧会へは欠かさず出掛けていた。毎回勝手に批評を書かせていただいてもいた。雅美さんがなかなか同人になれないので(生活上柔道の先生もやっていた)、クラス会の時、『二兎を追うものは一兎も得ず』の格言を「オレを殴ってもいいから柔道をやめ絵に専念しろ!!」と伝えたところ、彼はすぐに柔道をやめ、絵に専念しその年の春季展で文部大臣賞をとり、一躍時の人となった。友人としてこんなに嬉しいことはなかった。秋

の院展で大賞をとり、同人に推挙され一流画家の仲間入りを果たした。三越本店での「小谷津雅美展」は大変好評であって、全国的にも地位を確立した。多くのすばらしい作品

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

を描き続けていたが、早逝したのが悔まれる。わが家に「富士山」のすばらしい美しい作品が残されている。2月23日は「富士山の日」大事にしたい作品である。

奈文研時代では、京都在住のパンリアルのリーダー日本画家の下村良之介さんと京都で良く飲ませていただいた。それは、インドボンベイの日本山妙法寺での共同生活が始まりであった。下村さんは考古学が好きで、ボンベイでは一緒に周辺の遺跡めぐりをした。帰国後、私が奈文研へ就職した関係で京都へ良く行くようになり、下村さんが京大の水野先生とも親しく周囲はすばらしい知識人ばかりで、勝手に親しくさせていただいていた。先斗町での下村さんの行きつけの美人

姉妹の居る酒場へは何回か連れていってもらった。その席に陶芸家の名人八木一夫さんがいつも居た。八木さんは、やおらポケットからイグサで作ったヒモを取り出し、「これ1本さえあればどんな焼きものでも作れる」と申された言葉は今も忘れることはできない。超一流作家というものはそのうものである。下村さんはいつもボヤイていた。「娘たちが私の絵をみると、お父さんの描く鳥はみんな死んでいる」と。一流作家になると発言も面白いし、一般人にはわからないすばらしい何かを持っている。彼等の環境と居場所、考え方、作品への集中力この中味を私に教えてくれた。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

## リレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 120

#### 石川条里遺跡 ～長野県長野市～

白居 直之

長野自動車道を松本から長野方面へ車を走らせ、筑北からのトンネルを過ぎると善光寺平が一望できる姨捨サービスエリアに至る。「田毎の月」の棚田で有名な姨捨から北東に目を向けると千曲川の蛇行とその周辺の街並み、水田と盆地に迫りくる丘陵にクニ(国)の広がりを感じることができる。姨捨から数キロ走行し、盆地が開ける最後の長谷トンネルを抜けると善光寺平西に位置する長野市篠ノ井を通過する。このトンネル出口から高速道路に沿って長野市東側を山麓に沿うように約20kmわたり遺跡群が途切れることなく存在する。長野道及び上信越道建設に伴う発掘調査が1988年(昭和63年)から本格的に始まり、県内では今までに経験したことのない大規模な沖積地、自然堤防上の調査となり、何層もの堆積層に埋もれた文化層をもつ遺跡群に遭遇することとなった。その最初の遺跡が千曲川左岸の後背湿地に立地する石川条里遺跡でした。

石川条里遺跡は長野市教育委員会が1982年(昭和57年)から圃場整備事業に伴う記録保存を目的として発掘調査を実施したのをはじめとし、今日まで断続的に調査が実施され大きな成果をえている。「地籍は長野市篠ノ井石川」ですが「条里」という遺跡名称は地表面の条里地割りに因んだものであり、発掘調査でも平安時代前期(9世紀)の千曲川の洪水によって埋没した条里地割の存在を確認している。中央自動車道長野線工事に伴う調査は1988年(昭和63)から1991年(平成3)にわって長野県埋蔵文化財センターによって行われ、1997年(平成9)に報告書が刊行された。



▲鳥形木製品



▲石川条里遺跡の祭祀遺構(古墳前期)

〔長野県埋蔵文化財センター1989 長野県埋蔵文化財センター年報6〕より引用

善光寺平南西域は、農耕生産域となる広大な沖積地と北陸地域を結ぶ交通の要所として弥生時代から古墳時代にかけて信濃の中核的な位置を占め、古代、中世に引き継がれる地域である。この地域で調査された遺跡の内容は居住域・墓域の規模、出土遺物の特異性など県内でも群を抜き、本遺跡には当該期の政治・社会的な基盤となる集落域・生産域が想定されていた。隣接する鶴前遺跡の山麓域から千曲川自然堤防に向かって調査が進むにつれ単純な低地ではなく、小微高地がいくつか検出され、遺構の検出時期に断絶があることが確認された。ことに東西調査域中央部に比較的広範囲に広がる小微高地が存在し、縄文時代、古墳時代前期、中世の3時期を中心とした遺構が検出された。低地では地表面下4mに及ぶ土壌から弥生時代中期に遡る水田址の痕跡と遺物が出土した。この石川条里遺跡(高速道地点)で注目すべきは、古墳時代前期の特殊祭祀遺構と弥生後期～古墳前期に帰属する水田址と多量の木製品である。

古墳時代前期の遺構は、幅10～13mの大溝、溝に囲われた中から検出された大量の土器・炭化物・焼土を含む200基をこえる土坑群によって構成された祭祀場であり、溝及び土坑群からは石釧・車輪石・銅鏡・銅鏃・各種玉類など大型古墳に埋納される遺物が出土した。調査当時の担当は隣接する水田域でしたが、状況を見に行くと、土坑から出土する土器がともかく多量で、小型丸底、小型器台、屈折脚の高杯という器種が多いことにも驚かされました。遺跡整理で土器を担当したとき、在地の「赤い土器」(箱清水式土器)に執着していた私は、善光寺平が畿内型祭式に圧倒された結末だと感傷に浸ったこともありましたが、それでも、石釧、車輪石を身近に手にすることができた感動も忘れません。また、溝内から出土するナスビ型の木製農耕具(掘削具)が大型であること、乾燥のために薄くなっているものの大型板材がまとまって廃棄されていること、縁辺に杭列が検出されたことなどにこの遺構がただならぬものであることが予見されました。古墳時代の豪族居館が各地で話題になっていた当時、私はそれに近い建物址をイメージしていました。

遺跡周辺には川柳將軍塚をはじめ首長クラスの古墳が点在し、この特殊遺構については豪族居館、農耕祭祀、首長継承祭祀(葬送儀礼)などの痕跡と推測され、その状況からは首長が関わる祭祀場であることは容易に判断されました。今では「地域首長と集落の人々による葬送儀礼がおこなわれ、その終末の廃棄、遺棄行為の遺構だという」解釈が最もすっきりする気がしますが、古墳時代前期の石川型祭祀と言うべき類例のない発見でした。

低地に広がる水田はイネ化石の分析から弥生時代中期に遡る水田址の存在が確認され、弥生時代の水田区画がどのような形状であったか期待されるどころでしたが、断片的な区画を知ることしかできませんでした。調査区法面の層位からは捉えられていた畦畔も、重機と手作業による平面精査で起伏の連続性を確認することへの難しさを痛感し、この経験は同市内の川田条里遺跡に引き継がれることになりました。小畦

畔は明確ではなかったものの、杭材と木材を芯材とする恒常的な畦畔と200mに及び水路が検出されました。幅約3m前後の水路は埋没、改修されながら弥生後期から古墳前期に継続的に利用され、多量の木製品が出土しました。この木製品の出土によって県内で初めて保存処理施設が整い、個人的には木製品研究の発端となりました。木製品は農具200点余りと、呪符木簡、齋申などの祭祀具、武具、建築部材、用途不明の木材を含め800点余に及び、遺物の機種分類、用途や名称を考える日々でした。木製品に関しては全国各地で出土例が増えつつあった頃で、多くの研究者が集い研究が深まった時期でもありました。数ある出土品の中でとりわけ興味を惹いたのは胴部と翼部を栓でとめた鳥形木製品でした。

高速道を利用するとき、本遺跡上を通過する十数秒間、古墳時代の祭祀と耕作のイメージを思い浮かべます。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは青木一男さんです。

## 考古学者の書棚

### 「中世都市研究18 中世都市から城下町へ」

中世都市研究会編／代表：五味文彦、小野正敏、玉井哲雄／山川出版社(2013)——伊藤 創

本書の最大の魅力は、中世都市の多様な魅力をわかりやすく提示した上で、それらが画一性の高い近世城下町へと変遷していく過程を、全国屈指の中近世研究者が、考古学的及び歴史地理学的視点で論じている点にある。

本書は、2012年に開催された、中世都市研究会2012大阪大会「中世都市から城下町へ」の研究発表を基に、新たに原稿が執筆されたものであり、主な内容は下記の通りである。

#### 第一部◎中世都市から城下町へ

城下町—中世都市から天下統一の拠点へ—

二木 宏

東アジアのなかの城下町

玉井 哲雄

城郭・城下町と都市のネットワーク

中西 裕樹

摂津・播磨国における城・城下町と町・村

山上 雅弘

上町台地の中世都市から大坂城下町へ

大澤 研一

阿波勝瑞—城下町の立地と景観—

山村 亜希

若狭小浜—守護所から近世城下町へ—

下仲 隆浩

下野佐野—清水城・唐沢山城から佐野城の時代へ—

出居 博

#### 第二部◎全体討論「中世都市から城下町へ」

#### 第三部◎都市・城郭研究の最新動向

2012.4～2013.3

本書は、全体を通じて「領国内において、港町、宗教都市、城下町が並列関係にあった。」「城下町は中世都市の一類型」であったという視点が貫かれている。それが近世へと移り変わるにつれ、城下町の存在性・卓越性が高まり、やがて政治的・経済的に一極集中的な機能を有する近世城下町が成立したと説明している。私にとってとりわけ魅力的で、目が開かれる思

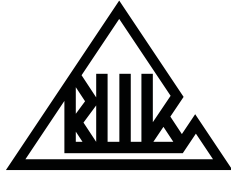
いがしたのは、本書の随所で強調されている中世の町の多様性である。

本書では、畿内において山城を拠点に都市間ネットワークを掌握し、阿波においては地形的制約の著しい勝瑞館を拠点に一水運ラインを掌握した三好氏、惣構の城郭を整備し直接的な都市支配を目指した摂津の荒木氏、播磨守護赤松氏ほか有力豪族の拠点城郭を上回る豊かな遺物出土を誇る兵庫津、宗教領主が卓越した地域で、寺社を移転し城下町の建設を断行した豊臣政権、既存の湊町を大きく改変することなく近世城下町を成立させた若狭小浜、伝統的な拠点を放棄し、新たな城下町を成立させた下野の佐野氏などの事例が紹介されており、各地域の特性に則った、多様な支配のあり様や都市の姿が具体的に描かれている。

私の住む町は、開発があまり進んでおらず、文化財・観光業界でも必ずしもメジャーな場所ではない。この町の歴史的な個性やアイデンティティは何なのか、私はずっと思い悩んでいた。しかし、本書で描かれている多様な都市のあり様を評価する視点は、私の住む町のような場所こそ、より生きてくるとはではないか。なぜなら、開発が進んでいないということは、中世以来の面影を残す古い町割りなどが良く残っている可能性があるということであり、これを本書の視点で研究するならば、この地域特有の中世の町や集落の姿を引き出すことができるかもしれないからである。中世都市の多様性を重視した視点で改めて自分の町の歴史を見直すなら、新たな魅力の発見につながるはずだ。本書は私を、魅力的かつ新たな研究分野へ誘うきっかけを与えてくれた本なのである。

#### アルカ通信 No.127

発行日 2014年4月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.126  
2014.3.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 - 塚本師也

### 第12回

### 阿玉台式土器の変遷

ここでは阿玉台Ia式からIV式までの土器の系統的な変遷を辿る。

阿玉台Ia式土器には、平縁と波状口縁がある。波状口縁の土器は、頂部が尖る土器(第8図4)と平坦な土器(第8図3)があり、五領ケ台式の系統を引く。阿玉台Ib式古段階では、波状口縁の土器はほぼ消滅する。頸部が強く括れ、体部が張る器形に、波状口縁と波頂部下の渦巻文が僅かに残ると考えている。阿玉台Ib式新段階では、平縁の区画の接点部分が上方に伸び、波状口縁が復活する。体部が張る器形に、命脈を保った波頂部下の渦巻文が、波状口縁の頂部

下に進出する。以後波頂部下から直線的に隆帯を垂下させる土器(第8図12)と渦巻文を配す土器(第8図11)が並存する。体部が張る器形は、波頂部に皿状突起を付け、そこから渦巻文を垂下させるようになり(第8図10)、阿玉台II式まで続く(第8図15)。

阿玉台Ia式の平縁の土器は、隆帯と角押文がともに1周しない、狭い区画を配すものが多い(第8図1)。阿玉台Ib式に、口辺部、頸部、体部の三帯構成とともに、隆帯と押し文がともに一周する定型的な区画文が確立し(第8図8)、以後IV式まで続く(第8図21)。阿玉台Ia式には、平縁の区画境に、

やや間隔を開け、V字状突起や粘土棒を粘土帯で囲った突起を2個並列させるもの(第8図2)がある。この部分を上方に突出させて阿玉台Ib式に扇状把手が生成され(第8図6・9)、阿玉台II式まで存在する(第8図14)。このことは、西村正衛がすでに指摘している(西村1969)。

魚鱗状や粘土棒を粘土帯で囲った突起のみが見つかる土器は阿玉台Ia式からII式まで存在する。V字状突起が付く土器、無文もしくは地文のみの土器は全時期を通じて存在する。

阿玉式Ia式	阿玉式Ib式(古)	阿玉式Ib式(新)	阿玉式II式	阿玉式III式	阿玉式IV式
1	5	8	13	18	21
2	6	9	14		
3		10	15		
4		11	16	19	22
	7	12	17	20	23

第8図  
阿玉台式土器変遷図  
縮尺: 1/24

1. 千葉県加茂遺跡
2. 福島県法正尻遺跡
3. 新潟県城林遺跡
- 4・15 群馬県房谷戸遺跡
- 5・7. 千葉県水砂遺跡
6. 千葉県中山新田I遺跡
- 8・12・17 千葉県子と清水貝塚
9. 埼玉県亀居遺跡
10. 東京都木曾中学校遺跡
11. 栃木県免ノ内台遺跡
13. 千葉県向油田貝塚
14. 茨城県陸平貝塚
16. 福島県大畑貝塚
- 18・21. 栃木県機沢遺跡
19. 栃木県湯坂遺跡
20. 茨城県宮後遺跡
22. 栃木県御城田遺跡
23. 茨城県中台遺跡

【参考文献】

西村正衛, 1969, 「千葉県小見川町木之内明神貝塚—東部関東における縄文中・後期文化の研究—その一」『早稲田大学教育学部学術研究』第19号

【出典】

第7~11回と同じ

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■阿玉台式土器	阿玉台式土器の変遷	塚本師也 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第119回)	宮島義和 …2
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第14回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	『古代遊牧騎馬民の国—草原から中原へ—』	濱野浩美 …3

## 考古学の履歴書

## 良き師・良き友に恵まれて(第14回)

渡辺 誠

## 16. トチやドングリ類の食習俗

先に記した桑飼下遺跡の発掘において多量の植物遺体を発掘し、主体を占めるトチやドングリ類の食べ方について、その民俗調査に集中することになった。そのうちドングリ類については桑飼下遺跡周辺でも聞き取り調査ができたが、トチについてはできなかった。

当然各地の民俗調査報告書については読み漁ったが、トチについてはいい例に恵まれなかった。この壁に突破口を開けてくれたのは、しばしば平安博物館に見えられた峰 巍氏である。同氏のお父さんの戦友の実家から、正月になるとトチモチが送られてくると言うことであった。そして鳥取県智頭町に聞き取り調査に出かけ始めたのである。いい御縁の恩恵を受けたわけである。

しかし調査が進むにつれて、話を聞かせてくれる年寄りはどんどん減少していることがよく分り、あせりを覚えたことであつた。少し詳しく記せば、由良川河口に近い桑飼下遺跡では、花粉分析ではトチの花粉は検出されず、それなりの地域まで採集に出掛けていたことが分かる。それでもその範囲は日帰り圏内と考えられる。トチに因む地名が各地にみられるのは、その名残であろう。しかし今ではトチモチ自体は、京都府下ではその最上流部の京北町でしか作られていない。良材として伐採され、どんどんその範囲が後退してきたのである。この京北町での調査には、当時関西大学の学生であった南 博史氏などが協力してくれた。こうした絶滅寸前の民俗調査には、川端敏史・小沢一弘氏にも大いに協力して頂いた。

そしてトチのように1属1種の植物と違い、ドングリ類は約20種もあり、おまけにアク抜きや仕上げの仕方も種類によって異なっている。もちろんこの習俗も衰退の一途をたどっており、大いにあせったのである。それでもアク抜き不要のシイ類を除き、

西日本に多いカシ類は水でさらすだけでいい。しかし東日本のクヌギ。ナラ類などは、これに加えて煮沸を繰り返すことも必要であり、ここにたどりついて、一安心と思ってしまった。すなわち種類差から地域差を生じていると思ってしまったのである。

しかし頻りに韓国へ出かけている江坂輝弥先生には、韓国ではすべて水さらしだけでドングリ豆腐をつくっていることを教えて頂いた。このことについては、後に名古屋大学へ移った頃に、慶應義塾大学と釜山大学との国際研究のチームができ、そのメンバーに加えて頂き、解決することができた。4回の訪韓で分かったのは、韓国は南海岸を除き、東日本と同様に落葉広葉樹林に覆われていて、ドングリ豆腐を作っているところを見学するとクヌギ類ばかりが使われていた。そして豆腐にする加工工程で重要なのは、粉碎し製粉することであることが分かった。製粉することによって水さらしのみでアク抜きができるということである。東日本ではドングリ豆腐を作らないし、粒のまま食べていたのである。このことを縄文時代について考えれば、磨石や石皿などの発達する縄文中期の前と後に当て嵌めて考えることを示している。

韓国ではドングリ食ばかり調べていた訳ではない。支石墓や古墳、山城も見て歩いた。木浦大学の貝塚や、東亜大学の靑島遺跡の発掘にも参加させて頂き、さらに全南地方の前方後円墳を見て回ったのは楽しい思い出である。

## 略歴

昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる  
昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業  
昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学  
昭和43年3月 同上大学院博士課程修了  
昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務  
昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授  
平成元年4月 同上教授  
平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授  
平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)  
平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 119

## 屋代遺跡群 ～ 長野県千曲市

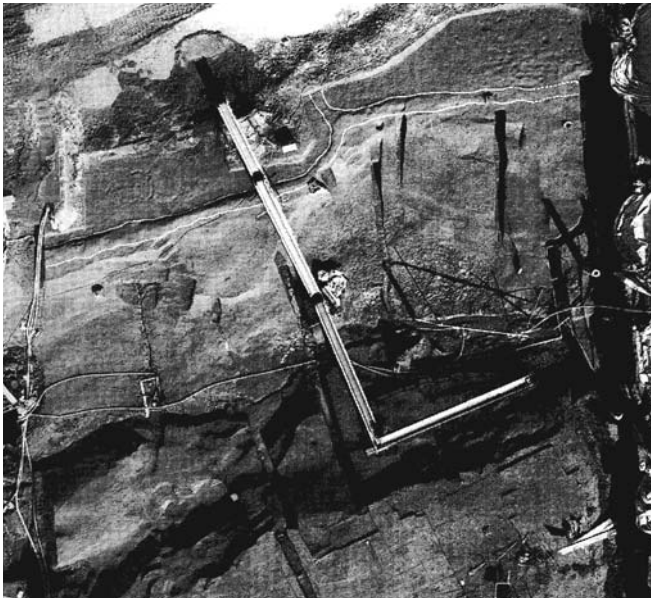
宮島 義和

上信越自動車道を上田方面から車を走らせ、トンネルを抜けきると視界が開けて千曲市の平らに入る、そこから更埴条里遺跡となる。長野県埋蔵文化財センターは平成3年より6年までの4年間、更埴ジャンクションに到達する2.3kmの区間を幅60mで発掘調査を行った。千曲川の後背湿地の水田地帯を更埴条里遺跡とし、南端のA区から自然堤防にかかるK区まで調査区を設定した。その北の自然堤防部は屋代遺跡群となり南端の①区から旧河川に落ち込む⑥区の調査を行った。

さて、騒ぎは平成6年の屋代遺跡群最北端の⑥区の調査で起った。千曲川旧河道に落ち込む部分であり、恐らく水田が

検出される程度で終わるだろうと踏んでいた。しかし掘ってみると旧河道に残された自然流路跡やそれにつながるように斜面に掘られた溝から大量の木器が出土したのである。

さてある日、都合で年休をとった翌日作業員さんたちは溝をきれいに削ってくれてあり、遺物だけが山に何て残されていた。その中に中央に孔のあいた小板があり「何だろう」と思って取り上げてみるとなんと裏に墨書があり、しかも「物部」とはっきり読めるのである。屋代遺跡群で木簡が出土した最初の瞬間であった。これは多くの木製品の中に木簡が混じっている可能性が高いということになり、板状のものが出ると目を



▲屋代遺跡群⑥区

凝らして観察するようになった。

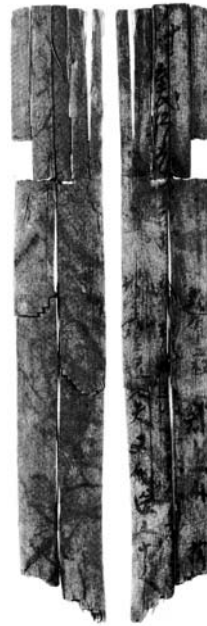
そしてその日は来た。「先生こんなものが出た」とタッパーの蓋の上に乗せられて大きな板が運ばれてきた。案の定木簡である。字がはっきりと読み取れる。しかしそれは完形品ではなかった。上部が幾つかに切断され、接合してみると真ん中のあたりの部品がない。ところが欠損したその下には「里正」と書かれている。私にも「里」が古代の行政単位であることは分かる。失われた部分には必ずや「里」の名前が書かれているはずである。なんて惜しいことだろうか。とにかく班長の寺内隆夫氏に報告し作業員さんを集めてすごい木簡が出土したことを報告した。タッパーの蓋を持つ手は小刻みに震えたことを覚えている。「それにしても一番おいしいところが残っていないなんて、まあこんなものかな」と思った。そして昼休みに入った。

弁当を食べながらそれでもどうしてあの部分だけがないんだろうかと解せない気持ちでいっぱいであった。

その日はたまたま作業員さんたちの健康診断の日で、午後1時から検診が始まった。私はその時ぱっと思った、「もしかし

たら廃土の中に!」私は無人の現場へ走った。

廃土場は午前中のままの状態であった。私はそこに飛び込みとにかく木のかけらを探した。最後の望みにかけて。すると切断されたとみられる木板片を発見した。すかさず取り上げ目を凝らすと字が書いてあることがすぐにわかった。私はプレハブに走り、先ほど出土した木簡の頭の部分に着けてみた。何と接合するではないか。接合して字を凝視する「符屋代郷長」と読み取れる、それが残りの「里正」へと続くのである。世に言う「郡符木簡」発見の瞬間であった。



▲郡符木簡

それにしてもラッキーだったのはその日が健康診断であったことだ。そうでなければすぐに発掘作業は始まり、木簡の破片は新たな土の下に埋もれていたことになる。まさに「奇跡の健康診断」であった。その後数多くの木製祭祀具が出土し、祭祀遺構も検出された。屋代遺跡群⑥区は5世紀中葉以降続く一大水辺の祭祀場であったことが分かった。

その後の赤外線による観察で木簡の数は増え続け、130点を越えた。中には7世紀後半のものも含み、全国的にも珍しい国符木簡が存在することが判明するとともに、軍団に関わるものなど多彩な内容をもち、官衙に関わる木簡群であることが推定された。そして祭祀も郡家などに関わる可能性が高まった。現在木簡及び木製品の保存処理が県立歴史館で行われ、来年には展示会が行われる予定だそうである。私は木器群の整理作業に携わり報告書を刊行した。これによって私の人生は大きな転機を迎えることになった。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは臼居直之さんです。

## 考古学者の書棚

### 「古代遊牧騎馬民の国 — 草原から中原へ —」

船木勝馬著／誠文堂新光社(1989)

濱野 浩美

#### 匈奴、独自に鉄生産か 愛媛大など、モンゴルで炉跡発見

2013年11月、朝日新聞に掲載された記事である。モンゴル高原を中心に紀元前3～紀元後1世紀に亘って覇を唱えた遊牧騎馬民族、匈奴の製鉄遺構が、愛媛大とモンゴル科学アカデミー考古学研究所の共同調査団により発見されたという。中国の史書『二十二史劄記』によれば、漢代の匈奴に皇帝や皇后冊立に際して金人を鑄造する風習があったことが述べられている。匈奴による西方民族特有の製鉄炉の発見は、

まさにこの記述を裏付けるものである。この製鉄炉で匈奴は金人を鑄造して吉凶を占ったのであろうか。シルクロードならぬメタルロードによせる想いは尽きない。

考古学のみならず、歴史を考える上で日本とアジアとの関係は切り離して考えられるものではない。古くは、東北アジアの遊牧騎馬民族が朝鮮半島を南下し日本で農耕民族と化したという説など、考古学史に残る論が討議されてきた。しかしながら、遊牧騎馬民族に対して、私たち日本の考古学者は正確

に理解しているのだろうか。この謎多くそして浪漫あふれる遊牧騎馬民族について、原典解題を行いながらも、優しい日本語を用いて、簡明に説いてくれるのが本書である。構成は以下のごとき、紀元前1300年の殷代から、5世紀の五胡十六国時代まで、史書に僅かながら記載される古代遊牧騎馬民族が中原に国家を立てていくまでが述べられている。

## 目次

### 東胡の登場と分散

甲骨に刻まれた異邦人  
 古典と金文が語る異民族  
 モンゴル草原の争覇戦  
 きゅうり・くるみ・ごま

### 烏桓・鮮卑の動向

中国の盾となった烏桓  
 匈奴に変わった鮮卑  
 烏桓人・鮮卑人の生活

### 長城を越えた鮮卑

遼西に展開した諸部族  
 華北に進出した鮮卑  
 河西回廊をめぐる攻防

### 拓跋部の中国支配

伝説時代から歴史時代へ  
 代公から代王への道のり  
 国号を魏と定めて  
 内乱を乗り越え中原へ

漢民族は早くから北方異民族の侵入を受け、その対応に苦慮していた。すなわち中国の歴史は周辺民族との関係であり、アジアの歴史は南方の農耕民と北方の狩猟・遊牧民族との対立構造の歴史である。勢力抗争のなか、一方では官位を与え北方異民族招撫対策を行い、漢化政策に努める。中でも興味深いのは鮮卑系民族の動向である。

鮮卑系民族は、後漢の頃、匈奴の冒頓単于に敗れ、遠く遼東の塞外に逃れた東胡の一部族といわれている。この鮮卑系民族は87年、北匈奴を撃ち、モンゴリアの支配権を確立し、ある時は後漢に降り、ある時は後漢に反し、周辺異民族とも攻防を繰り返す。彼らについては『後漢書』に東方の倭人に魚を捉えさせたという記述がある。倭人の漁法が活用されたという記事は興味深い。著者は倭人＝日本人と即断する危険性についての根拠を提示して述べながらも、これが日本沿岸の漁民であるとすれば、2世紀段階で日本人は確実に鮮卑人と交流していたと推測する。さらに、多くの考古学者も目にする『三国志』倭人伝にみられる大人の記述は、同時代の匈奴・烏桓・鮮卑等の周辺民族にみられる大人と同じ概念で中

国側が認識したものだろうと述べる。

漢化政策とともに、夷を以て夷を制する中国の政策は、また異民族交流を盛んにした。慕容鮮卑はいわゆる歩揺冠がその部族名となった遊牧民族である。この民族は、北周を建てた宇文部と攻防し、285年には扶余を征した。この扶余の民万余人の徒民と漢人の流入により慕容鮮卑自体の定住化が進む。この結果、多数の漢人の流入や、中国的官制の積極採用などにより国家自体が漢化していく。この漢化政策は、同時に強大であった遊牧騎馬民族特有の文化を手放すことに繋がり、国力は衰退していく。この政策は現在も中国のチベットやウイグルに対する政策に通じるものであり、考えさせられる。

他方、多民族交流は生活・風習・思想などあらゆる文化融合を生み、それらを備えた人間が日本へも渡来する。慕容鮮卑が推奨した製塩・製鉄技術は日本に持ち込まれたであろうし、祖先ゆかりの河川のほとりで鬼神・天地・日月・星辰・山川などを祀る騎馬民族固有の祭典儀礼は古墳や祭祀遺構などにも通有する。

五胡十六国時代、鮮卑系民族は、北魏王朝の建設など中原に国家を形成する。万里の長城北辺で遊牧生活を営み、部族社会を形成していた騎馬民族が、農耕社会に基盤を置く漢民族を寇略していた時代から、南侵して中国を直接統治するようになり、ついには中国の伝統国家へと衣替えしていくのである。なかでも、北魏は西域伝来の仏教の保護奨励を行い、その文化は彼ら独自の文化と融合しながら日本へ伝わる。仏教美術で語られる北魏様式には騎馬民族固有の文化が息づいているのである。

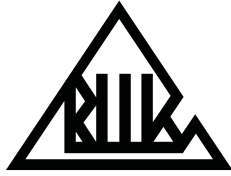
考古学に携わるものとして常にミクロな視線とマクロな視点、これを持ち合わせないといけぬ。近年、膨大な調査報告をもとに他分野、多角的な視野からの総合的研究が進む。なかでも文献学との相互研究は飛躍的な進歩を遂げている。しかしながら、国外の文献資料の解題となると、史書をそのまま引用してしまいがちである。著者は、膨大な史書の羅列の中から、徹底した史料批判を行って史実を確認しつつ、歴史の流れを汲みとっていく。また、その記述には、書き手である中国人側の認識が必ず介在することを強く説く。盲目的に資料引用することの危うさを十分認識したうえで、史料批判し、そこから自論を形作っていくこと、常にそれを心がけなければいけないと痛感する。

近年、冒頭の記事のように遊牧騎馬民族に関する発掘調査件数も増加している。著者の描いた古代遊牧騎馬民の国の実態が明かされる日もそう遠くないだろう。シルクロードに対するあこがれを誰しも

もったことがあると思う。かく云う私も、現在の道に通じる一歩はそこにある。自分の基本に立ち返る時、必携の書がこの本である。

## アルカ通信 No.126

発行日 2014年3月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : http://www.aruka.co.jp



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.125

2014. 2. 1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

35

## 「木曾西高校地歴部の活動と卒業生」

**36年** 開田高原柳又遺跡に多くの仲間が参加しており、私も参加し各地からの、地元の仲間と親しくなり、木曾西校地歴部も先輩の青沼博之君がいて繋がりが強くなる。日義中学校郷土班卒業生が何人も地歴部に入部し私の遺跡調査を手伝ってくれるようになった。

**終戦後** 多くの高校に文科系のクラブ活動が盛んになり地歴部・郷土班等の考古系のクラブも多かった。24年12月1日中南信学生考古学会設立準備会が塩尻市桔梗ヶ原高校であった。諏訪清陵高校戸沢充則・松本県ヶ丘高校桐原健・桔梗ヶ原高校太田さん・木曾西高校安藤茂良・飯田高校今村賢司・松島透が参加した。木曾西校には藤沢宗平先生が21～25年勤務して地歴部を創設して郡内の調査一南木曾町太田垣外遺跡・神坂村青野原遺跡・日義村芝垣外遺跡・木相村深沢遺跡などを調査していた。その伝統が引き継がれ山口村山ノ神古墳の調査をし、32～35年に木曾東高校に樋口昇一先生が勤務し考古学の指導を受けるようになり、更に木曾教育会郷土館委員の先生とも調査を共にして郡内の遺跡調査をしている。読書村戸場遺跡・吾妻村細之山遺跡・開田村管沢遺跡・柳又遺跡・上松町最中遺跡がそうである。私が日義小中学校に36年に転任してきてからは私が指導しての調査が始まった。日義村お玉の森遺跡・巴松遺跡・稲荷沢遺跡・砂ヶ瀬洞窟等がそれであり、木曾教育会郷土館委員主体の開田村小馬背遺跡・西又Ⅱ遺跡にも部員が大勢参加している。中央西線福島一原野間複線化工事に伴う発掘調査では松本県が丘高校風土研究会と共同調査をしている。

お玉の森遺跡では校庭の平安時代1号住居址を担当してもらった。鍛冶遺構が住居内にあった特別な住居址であったが、私が出張で留守をして

いる間に調査したため帰ってきて現地に行ったら鍛冶遺構が壊されていて残念だった。まかせっきりにした私が悪かった。巴松遺跡はゴルフ場の土取りで丘が崩されて切り取りに竪穴住居の掘り込みが2箇所確認された。調査したら木曾では珍しい弥生後期のもので、甕片を埋めた炉や完形の甕が三個並んで出土したので私も生徒も興奮した。砂ヶ瀬洞窟は砂ヶ瀬川上流の石灰岩地帯にあって、古代人の生活痕跡を見つけようと期待したが、あまり大きくない洞窟でテラスもなく痕跡は確認できなかった。稲荷沢遺跡は国道管理維持事務所の建設で事前調査を要求するが拒否され、生徒の勉強になるならと2日間の調査が許されて慌ただしく調査をする。縄文早期押型文土器立野式土器の資料が多く焼石炉も検出するが実測図も取れずに終わったのが残念だった。大変だったのは西又Ⅱ遺跡の調査でした。木曾の仲間でも有舌尖頭器を掘ってということで木曾教育会郷土館委員が中心になって地歴部もみんなが参加した。夜懇親慰労会で少しはよかろうと高校生にも酒を飲ませた。その後先輩の青沼君が高校生相手に相撲をとった。暫らくして高校生が吐いたり・下痢の騒ぎとなった。悪酔いさせたとと思ったら青沼君以外の全員が同じ症状になった。昼休みに遺跡近くの山で採った茸汁にあたったので、一人飲まなかった青沼君だけが元気だった。翌日私は県教育委員会指導主事でしたので責任者としてテレビや新聞に報道されて大騒ぎとなった。

**活躍した生徒たち** 安藤茂良(信大 近世史)・楯英雄(国大 民俗)・青沼博之(愛知大 県埋文)・松山芳久(花園大 興禅寺)・清水祐三(信大 民俗 近代)・山下泰男(東海大 県埋文)・野村一寿(早大 県埋文)・和田晋治(明大 富士見市教委)・新谷和孝(立正大 木曾広域)・青木正洋(国大 諏訪市教委)・松原和也(富山大 木曾広域)・佐々木満(立正大 甲府市教委)があげられる。地歴部では活動を生徒会誌に発表したり、会誌『木曾谷』(32年)・『きそ路』(38・39年)に出している。今は活動が無い。



▲お玉の森遺跡で、木曾西高生と

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

## 目次

- |            |                             |          |                               |
|------------|-----------------------------|----------|-------------------------------|
| ■田舎考古学人回想誌 | 木曾西高校地歴部の活動と卒業生 神村 透 …1     | ■リレーエッセイ | マイ・フェイスレット・サイト(第118回) 竹原 学 …3 |
| ■考古学の履歴書   | 公務員としての考古学研究者(第14回) 石井則孝 …2 | ■考古学者の書棚 | 「文化財の社会史 近現代史と伝統文化の変遷」三瓶裕司 …4 |

## 考古学の履歴書

## 公務員としての考古学研究者(第14回)

石井 則孝

## 《わが友・わが趣味 ―その3―》

## 1. 前回の大学院芸術学の続き

曾津記念室での大学院の授業は、希望すれば学部学生・聴講生の参加も可能であった。椅子は10人分位しかなかったが、年長者は元金沢芸術大学教授の服部匡延さんと、元東博副館長の奥村秀雄さん、元清泉女子大教授の五味充子さん、元多摩美術大学図書館長の邑楽 弘さん、現在も女優として活躍している白石奈緒美さん等、多士済々のメンバーだった。緊張感あふれる授業で、安藤教授は多摩川の田舎から、毎日タクシーで昼頃大学に来られ、三朝庵のザルソバ二枚が到着すると、これが授業の開始であった。腹のすいている時、目の前で大きな音でソバをすする教授をどんなにうらやましく思ったとか……。使用された文献は「東大寺要録」「七代寺日記」「七代寺巡礼私記」「東征伝」「北越雪譜」「搜神記」等々 中国美術史を念頭に置いた学部学生にとってはかなり程度の高い授業であった。4時間ぐらいの演習授業であったと思う。安藤教授は、唐招提寺 鑑真和尚の研究の第一人者であり、曾津ハ一先生の高弟でもあった。学生たちには、奈良のことにあつてはあつてを学ばせようという考えであったと思う。

広重の東海道五十三次の浮世絵研究を行った際、授業の終了と共に、実際に東海道五十三次の実地調査をすることとなり、イズズの中型自動車、運転手は邑楽 弘さんと私、大陸横断の大旅行の経験のある私がほとんどその任に当たっていた。浮世絵に描かれた風物を確かめ、食に際してもその地の名物を食べながら3泊4日の大旅行を行った。奈良日吉館へ到着した途端車は故障し、奈良在住の安藤教授の親友・小泉 清画伯の弟子小川啓司イズズ自動車部長のお世話になったことを忘れることが出来ない。

## 2. 唐招提寺 戒学院宿泊研修

唐招提寺境内全体図を作成し、伽藍の配置状況を確認するため、服部・吉村・五味・邑楽・石井の面々が、安藤先生共々戒学院に宿泊して研修実習となった。戒律の厳しい唐招提寺、三食共唐招提寺の食堂で食していたが、それが全て精進料理、3日目頃になると全身の力が抜け、野外での作業が苦痛になっていた。茶ガユと漬物の毎日、若者には到底耐えられない。酒の代わりに本直し、これがきいたこと本直しで二日酔いに、これにはまいり、日吉館へS・O・S 招提寺へは内緒で山盛りのステーキを焼いて、オバチャン自から寺へ持参してくれた。これには全員大喜び、安藤先生もしかりであった。翌日からの作業が順調に進み、初期の目的を果たし帰京したのであった。

## 3. 日本ミイラ研究グループの発足

曾津記念室の授業の中で、「北越雪譜」を読むことになり、その中で登場してくる新潟県寺泊町西生寺にある弘智法印に関心が高まり「枯骸生けるが如し」の文章から、かつて曾津先生が若いころに見たということ安藤教授が記憶していて、日本にもミイラが現存していることがわかり、唐時代のミイラの現存もわかっていることから、本格的に日本のミイラと取り組もうと考えたのであった。

新潟大学解剖学教室の山内竣英・野崎孝夫・小片 保の諸教授の応援を得て、昭和34年の夏新潟日報の後援で弘智法印の調査に手をつけたのが最初であった。昭和35年の夏には、毎日新聞社の後援で「出羽三山ミイラ学術調査団が組織され、東北大学の堀一郎教授・鶴岡市の出羽三山の研究者戸川安章

氏も加わり、庄内地方に現存する入定ミイラ5体の調査を行った。学生メンバーとして、私と甲斐大策(画家・アフガン研究者)が加わり、実行部隊として大活躍した。同年秋には、東大の駒井和愛博士や早大の荻野三七彦博士等も加わり、「日本ミイラ研究グループ」が結成された。

昭和25年に実施された中尊寺藤原四代のミイラ調査は、日本のミイラ研究史上にエポック・メイキングな事件として取り上げられたが、あれは奥州藤原氏という限られた対象の研究であつて、広く日本におけるミイラ習俗の研究の一例としての藤原氏ミイラが取り上げられたに過ぎないのである。

われわれの研究グループは、ミイラを人類学上から、民俗学・宗教学・考古学・思想史・などの上から総合的にこの問題を解決しようと日本の科学に新しい扉を開いたと自負している。毎日新聞社事業部長であつて後に昭和女子大学副学長を勤めた松本 昭教授の「日本ミイラ」を読んでいただければ幸甚である。

## 4. チトー大統領からの招待

昭和30年(1955)代前半頃は、スターリン批判がはじまり、ジュネーブ4巨頭会談が開かれ、日ソ国交が回復し、南極観測が開始され、連・アメリカの人工衛星打ち上げが成功した頃である。

日本が東欧諸国と貿易を開始した頃で、ユーゴスラヴィアのチトー大統領がバルカン半島での勝利を治め、ようやく戦争が遠のいた時代であった。

ユーゴスラヴィアとの貿易を開始した日本企業が集まって「日本・ユーゴスラヴィア協会」を設立して、その会長に同和鉱業の社長で日本ボーイスカウト連盟の会長を務めていた久留島秀三郎氏が就任していた。

前記した夕管クラブの会員の中からチトー大統領に憧れていた学生が4～5人居て、ユーゴ大使館へ出入りするようになり、ユーゴ協会の会員となった後、ユーゴの研究を立ち上げようということとなり、「日本ユーゴスラヴィア協会青年部」を結成した。この中から早大出身の田中一生さんが、ベオグラード大学への留学が許され、初めて日本からユーゴへの研究者の一号として足跡を残すことになった。

この時代、ユーゴは新しい国家としての地固めのため、国内全体が遅れていた祖国の整備と建設に力を入れていた。そこでチトー大統領は毎年夏に、世界の青年たちの力を借りて道路建設を推し進めようとして、「世界青年友好祭」をベオグラードで開催していた。

田中一生のベオグラードでの生活が始まったことをユーゴ政府も知り、昭和37年に、ユーゴスラヴィア協会青年部宛て、チトー大統領からの招待状が届いた。

青年部としてこの機会を逃してはならじと、金井恵美(国際電電に勤務)、土田

純二(広告宣伝会社南北社)と私とが中心となって渡航費用を工面すべく、ユーゴスラヴィア協会所属の各企業に、久留島会長お墨付きのユーゴ行の趣意書をもって金集めに奔走した。予定の金子

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

が集まらず、派遣者も上記した3名となり、最後には会長から12万円を借用し同年の5月に横浜港からユーゴの貨物船ヴェルビットで、土田と石井が乗船し、金井は、仕事の都合上、航空機によるユーゴ入りを果たした。

船出はしたものの、ヴェルビットは4000吨の小貨物船で、太平洋の荒波、印度洋の大波に悩まされながら、アデンから紅

海に入り、スエズ運河を抜け地中海に入り、予定より遅れること1か月、ようやく8月の中旬リエカ港に上陸することが出来た。バルカン半島探検用に富士重工から提供されたスバル360とスバルサンバーも同時に下船させることが出来た。港には、田中一生・金井恵美が待っていた。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

## Uレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 118

#### 殿村遺跡 ～長野県松本市～

竹原 学

殿村遺跡は、松本市の北東部、旧東筑摩郡四賀村会田にある。私と遺跡の出会いには2008年、松本市教育委員会が合併後初めてこの地区で行った、学校建設に伴う発掘調査に遡る。最も当時私は他遺跡の調査を担当していた。当初は縄文・古代の集落跡と目されていた遺跡は調査開始直後から様相が一変し、校舎建設範囲を超えて台地を覆う人為的な盛土層が姿を現した。しかもその南縁には石積が伴っている。周辺からは15世紀代の陶磁器が出土し、中世の大規模な造成遺構であることは明らかだった。想定外の事態に調査期間は大幅に延長され、私も翌年から調査に加わることになった。経験したことのない中世の造成遺跡に直面し、その調査方法や解釈に大きく戸惑いつつも、調査はその年の12月まで進められた。

2年にわたる調査で明らかになったことは、造成が東西約80m・南北60mの範囲に及び、盛土が最大で3mに達していること、15世紀から16世紀にかけて拡張が4回繰り返され、その前半期において平場前面に石積が設けられたことである。石積は周辺で調達できる輝石安山岩の自然礫を加工せずに積む。古段階の石積では、最大2mに達する大型石材の最も広い面を表に向けて立てている。そのため控えは短く、せいぜい3、4段の不安定な垂直積みで高さも1m前後しかないなど、土木的効果よりも視覚的効果を意識した造りとなっている。また、近世城郭の石垣に見られる矩や反り、裏込栗石も一切ない。新段階の石積では築石が小振りになり控えの長い小口積みが



▲石積と平場遺構



▲虚空蔵山と会田の景観

意識されるが、やはり垂直積みで築石はなく、古段階の石積とともに隅角部を有さない、正面だけの構えである。

15世紀に遡る石積の検出は、信濃では例がなく全国的にも多くはない。これまで京都市銀閣寺・勝持寺、米原市能仁寺・弥高寺など近畿地方を中心にいくつかの例が知られるが、いずれも殿村の石積と同様の特徴を有し、戦国末期に城郭で採用される石垣以前の古い技法に基づくものと言えそうである。

次に平場上の遺構に目を移すと、広大な平場空間は石列（築地塀）、柵、溝で分割され、礎石建物や掘立柱建物、炉跡などの施設で全体が構成されている状況が見て取れた。出土遺物は、在地産土師質土器・古瀬戸・中国産陶磁・石製品・銭貨・鉄製品・木製品など、松本周辺の遺跡にあっては豊富で、とりわけ中国産陶磁（天目・青磁・白磁・青花）の存在と、風炉や中国産茶壺、上質な茶臼など茶道具の存在が目された。

これらの成果の中で最も注目すべき点は、大規模な労働力が投入された石積や造成、礎石建物の存在、高級陶磁器や茶道具の存在で、築造に有力な勢力が関与したことは間違いない。その勢力とは何か？私たちが当初注目したのは、中世この地域に拠点をついた土豪、会田氏である。特に殿村はその地名が示すように会田氏の居館があった地と伝わり、地元でもよく知られている。かかる造成跡が会田氏の居館跡ではないかとの期待は、私たちだけでなく遺跡に関心を寄せる地元の住民も抱くことになり、そのことが結果的に遺跡の現地保存決定という奇跡につながった。しかし、会田氏の実態はわずかな文書と伝承を除いて手掛りに乏しく、遺跡との関係も分からない。また、先の事例のように、15世紀代の石積はほとんどが寺院に伴うものであり、信濃における城館への礎石建物の導入も15世紀まで遡り得るのか疑問も残る。

従って、居館跡を積極的に肯定する根拠はなく、現状ではむしろ寺院など宗教施設の可能性を第一に考えている。かつて調査地に隣接する長安寺の旧伽藍がここにあり、会田氏と盛衰を共にしたとの寺伝もある。築造者は会田氏かあるいは会田氏と関わる宗教勢力のどちらかの可能性が高いのだろう。

こうしたことから、遺跡の性格をより明らかにするため、私たちは視野を遺跡の周辺にも拡大することにした。例えば会田盆地は鉄道開通以前まで交通の要衝であり、この地を通過する保福寺街道と北国脇往還（善光寺街道）は東山道とその支道に比定される古道だった。街道沿いの会田は最も開けた地で生産の拠点だった。近世に会田宿が整備されたこの地に会田氏が本拠を置いた理由を、交通路と生産基盤の側面から探る必要がある。もうひとつ、中世において一帯が宗教空間を形成していたことが注目される。殿村遺跡の背後には、盆地の北を画する連山の中にあつて、富士山型の独立峰として一際美しい姿を見せる虚空蔵山が聳えている。会田盆地のどこから見てもそ

れと分かる山容は、まさに地域の象徴的存在であり、その名前からも察するように真言修験やそれ以前からの山岳信仰と関わりが深い山だったのだろう。実際、山頂周辺には磐座を彷彿とする巨岩の露頭がいくつか存在する。

そして、山麓の岩井堂沢には寺社がひしめく。山の宗教性の象徴ともいえ山頂直下の洞窟に虚空蔵菩薩を祀る岩屋社にはじまり、麓の会田までの一帯には天正9年の記録に5カ寺の記載がある。その多くは元々真言密教系の寺院だったと考えられ、中世寺院が密集する宗教空間となっていた。

このように、交通の要衝、会田氏の拠点、宗教空間、この3

つの要素が会田地区の歴史的景観を形成している。これを明らかにすることが殿村遺跡の性格を解明する鍵となるに違いない。松本市教育委員会では平成22年から28年まで、保存が決定した殿村遺跡の発掘を進めるとともに、虚空蔵山一帯の歴史的景観の調査を実施することにした。

最初の調査から6年、殿村遺跡と密接に関わる虚空蔵山城の発掘調査、個人所蔵史料の調査など、事業は進展を見せつつある。その先にある遺跡の整備や歴史的景観の保全など、課題が山積する中、私と殿村遺跡の関わりも当分は続くことになるのであろう。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは宮島義和さんです。

## 考古学者の書棚

### 「文化財の社会史 近現代史と伝統文化の変遷」

森本和男 著／彩流社(2010)

三瓶 裕司

この本は親しくさせて頂いている著者ご本人から頂いた。読んで感想を聞かせるようにとのことであったが、頂いた時は正直たじろいだ。何しろ800頁に及ぶ大作であったためである。

読み始めて「この本は『文化財』そのものではなく、『文化財が近現代においてどのように取り扱われてきたかという歴史』を詳説しているのだな」ということがわかってきて、俄然興味を持って読みこんでいったことを思い出す。

この本の構成は以下の通り5部となっており、各部には章が設定され各論は全体で18章に及ぶ。

- 第一部 近代社会と古美術の成立
- 第二部 保存に関与した社会層と国民国家
- 第三部 思想教化としての史跡
- 第四部 海外における文化財
- 第五部 転生する「伝統文化」

第一部では幕末から明治初頭にかけて欧米列強とのかかわりの中、軽視されていく古器旧物についてまとめられ、古器旧物が次第に伝統文化としての文化財扱いから殖産政策にかかる商品として扱われる変化が述べられている。

具体には明治維新によって、政府による神道国教化に伴う神仏分離と祭政一致、神社からの仏像・仏具の排除令の発布、そして廃仏毀釈へと動く社会が示されている。またそのような世情の中、一方では幕末以来ヨーロッパ各地で開催された万国博覧会や博物館等の視察経験から「古器旧物を保全」する政策もとられ、あわせて国家事業として博覧会を開催し文化財としてではなく、殖産産業の担い手の一つとして古器旧物が扱われるようになる。

第二部では、明治に入り全国の社寺は、近世までそれぞれの社寺領として安堵されていた土地が公地化された。また、寺社ごとに勧進を目的に行われていた富くじなどを含めた様々な経済活動が禁止されたことで一部の社寺を除き急速に衰退する。その後、政府はこれらの社寺の財源として地域社会からの寄付をあてにする政策をとる。これは折からのインフレによって進んだ農村での階層分化とそれによって生まれた豪商農らの出現時期と重なる。こうした新興の富裕層らが地元の名士として介入していくことにより、各地で社寺の保存運動が活発化する。また何よりも政府は、各国の要人が日本の代表的な社寺の見学を目的に来日する様になっていることを鑑み放置しておけない状況となる。こうした背景から「古社寺保存法」が制定され、社寺とそれらが所蔵する古器旧物が保存されるようになった。

第三部では「古社寺保存法」施行以降、大正、昭和初頭にかけて制定された「史跡名勝天然記念物保存法」を経て明治天皇聖跡保存など急速に進む史跡・旧跡の思想教化利用、果ては軍部を中心とした主導グループによる史実を無視した神代研究などにより太平洋戦争へ突入していく様子が示されていく。

第四部では、海外の国々において文化財に対してどのような関与をしてきたのかということが述べられている。日清戦争時の略奪行為を手始めに、北清事変では日本を含めた各国の軍隊が中国大陸の文化財を海外へ持ち出している。その後、ハーグ国際平和会議により略奪行為が禁止された後も太平洋戦争終結にいたるまで様々な『文化財政策』がとられたとある。

第五部では、戦後GHQ文書をもとにアメリカによる文化財の保護政策について論じられている。

連合国最高司令官の政策として文化財の保護・文化財の軍事選挙の禁止・略奪文化財の同定・収集・報告を行うとの基本姿勢がとられたのに対し、日本側からは戦争に対する賠償を文化財によって行うという議論がわき上がったことなどがエピソードとして語られる。

また、日本側が略奪した文化財の返還についても言及されており、終戦以降、現在に至るまで解決に至っていないことが課題と紹介する。

最後の章では、今や先進諸国では膨大な文化財情報がデジタル化され、インターネットを通じて世界へ発信され続けている時代である。それに対し、日本の文化財情報が欧米の文化財情報に対して広く伝わっていない現状を憂い、各国に立ち遅れることのない様にと警鐘を鳴らす。

この本によって文化財とは、明治以降たった150年間でもこのように扱われ方や社会的立ち位置がめまぐるしく変化したことを改めて知った。その時々々の政策や風潮によって人心は流され、大切にしていたものを突如打ち捨てたり、売り払ったりする。今は『国民共有の財産』として扱われている文化財も、今後政策一つで扱いが軽くなってしまふ日が来るかもしれない。略奪文化財問題などは遠い昔の物語

ではなく、現在、日本考古学協会において『あるべきところへあるものを』と提起され続けている。

我々はこうした儆くて危ういものを扱っているのだ。

## アルカ通信 No.125

発行日 2014年2月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : http://www.aruka.co.jp